



I-OWA マンスリー・セミナー講演より 江戸に学ぶシリーズ(3) 江戸時代の経済思想

講演: 岡本 和久
レポーター: 赤堀 薫里

江戸に学ぶシリーズ 3 回目、最終回の今回は、江戸時代の経済思想についてというお話です。井原西鶴先生は日本永代蔵で有名です。「永代蔵」という言葉は非常に大きな意味を持っています。永代とは時間的に制限がない、極めて長期、子々孫々、代々つながるという意味です。蔵というのは財産全体のポートフォリオ。つまり、「永代蔵」というのは、非常に長期のポートフォリオという意味で、それをどういう風に管理していくのかが、彼の大きなテーマであったのです。

彼は浪費することなく慎ましやかな生活を奨励しています。時は元禄時代の中、蓄財の重要性を何度も言っています。淀屋没落のレッスンがあったのでしょうか。分を外してはいけません。「分」というのは大変おもしろいコンセプトです。ピザを切り分けて「これはオレの分、そっちがお前の分」という分です。人間一人一人、この世の中で何か与えられたシェアみないたものがある。それは、その人が社会に貢献して、その貢献の見返りとして与えられているものです。それがその人の分。その分を最大限に得るためには、十分に社会に貢献しないとイケない。これは身分制度が非常に固定的だった江戸時代に出て来た考え方かもしれません。しかし、成熟してきた今の日本の中でも、非常に重要な考え方になりつつあるでしょう。

分限というのは「自分が持っている社会におけるシェア」を限りまで得るという意味だろうと思います。西鶴先生は、分限になるためには、朝早くから夜遅くまで自分の家の職業を一生懸命働き、無駄遣いしないで始末して使えば、間違いなく分限への道に辿り着くといいました。分限とは親から譲り受けず、自分という人的資産を活用して、本人の才覚と知恵で働き出せるもの。今のお金で大体 5 億から 10 億円位の財産でしょう。

更に分限から長者へなるにはどうすればいいのか。長者になるためには資産を活用することで、今のお金で 10 億円以上稼ぎ出す人を長者だと言います。お金を貸して金利を得ることで、自分だけ一生懸命働いてなれる分限から、自分のお金を人にも使わせてあげることで資産を活用する。他人の人的資産を使い投資をすることで、利息が利息を生み、お金がお金を稼ぐことで長者になることができるわけです。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

武士の世界では貯蓄をして子孫に残すことが限界でした。今の日本もそういうところがあります。そうではなく、お金を活用して、つまりリスクをとって増やす。これが投資による資産形成です。江戸は宵越しの金はもたないという考え方でしたが、天下の台所である大阪では、いち早く複利の概念も広く理解されていました。

江戸時代の経営思想を考えてみます。まず倫理的に重要な要素が3つあります。一つ目は人々のお役に立つことをするという奉公意識。二つ目に、知足。分の限りを理解する分限意識とも言えるでしょう。そして最後が人の信用を得る体面意識。

経営手法として大切なのが、イノベーション(才覚)、ファイナンシャルマネジメント(算用)、プロジェクトマネジメント(始末)です。淀屋の失敗を踏まえて少しずつゆっくり着実に稼ぐ。基本にあるのが三方よしです。その上に永代蔵、永久に続くような大きなポートフォリオを形成していきます。そして、お金と物をつないでいるのは心であることの理解。これらが経営思想のエッセンスである気がします。



基本的な企業経営の考え方には、加えていく要素と調和する要素、つまり多様性を取り入れつつ



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

調和を達成するという考え方があります。それが「和」の概念です。豪商の世界では、血縁よりも家名やのれんの方が大事という考え方が浸透していきます。代々、商いを続けていくために視野が広く長くなります。足るを知る。欲張らない。自分の「分」以上のものを望まない。積小為大、小を積んで大と為す。もったいないという考え方やおかげさまという考え方。これらは資産運用にもとても役立つ考え方だと思います。

講演では、大阪の商人が作った教育機関である懐徳堂や、後にその懐徳堂の校長になり、仙台藩の財政危機を救った山片蟠桃について、庶民のために石門心学の普及に尽くした石田梅岩、道徳と経済を融合させた二宮尊徳の経済思想の解説がありました。

また最後に、和風の企業経営と和風の資産運用が、資本主義がグローバル時代における健全な姿に進化するための指針となるモデルとなり、和風の部分を、日本はもう少し自信を持って世界に対して発信してもいいのではないかと結ばれました。